

帝国大学における中国人女子留学生（1924-1944 年）

—— データ解説と事例分析 ——

周 一 川

要旨：

中国人女子留学生の帝国大学への進学は 1924 年から始まり、その数は多くはなかったものの、女子留学生の教育水準が高くなったことを示していた。初等・中等教育が主であった清末から高等教育へ移行し始めた民国初期を経て、1920 年代半ば、中国人女性の日本留学は帝国大学を含む高等教育を中心とした新しい局面を迎えた。また、近代中国の女性教育における日本留学の位置づけも、教育上重要かつ不可欠なものから、高等教育の補助的な手段へと変化した。

帝国大学の中国人女子留学生の在籍身分は、本科生と大学院生が極めて少なく、専攻生が主流であった。専攻生は帝国大学入学前にすでに高等教育を受けており、帝国大学の専攻生制度は、来日した高学歴の中国人知識人女性に再学習と研究を深めるチャンスを提供した。

キーワード：中国人女子留学生；帝国大学；留日学生統計；補給留学生

はじめに

20 数年前に、筆者は博士論文を基礎に近代中国人女性の日本留学の歴史を『中国人女性の日本留学史研究』⁽¹⁾にまとめた。しかし、この研究では帝国大学に関して数名の事例しか取り上げることができなかった。最近、帝国大学の中国人女子留学生の名簿などの資料を整理し、その実態がわかり始めた。本稿は、拙著『中国人女性の日本留学史研究』の続編であり、重要な補足でもある。

帝国大学は、日本の最高レベルの教育機関であり、留学生たちの憧れであった。清朝末期から帝国大学では中国人男子留学生が学んでいたが、最初の中国人女子留学生が入学したのは 1924 年であった。

帝国大学は長い間男性の世界であり、初めて女子学生に門戸が開かれたのは 1913 年のことで、同年東北帝国大学理学部に 3 名の女子学生が入学した⁽²⁾。1920 年代に入り、他の帝国大学も少数の女子学生を受け入れるようになり、中国人女性もこの時期に帝国大学のキャンパスに姿を現すようになった。

帝国大学の留学生についての調査研究は、大学史の編纂から進められ、近年もいくつかの研究成果⁽³⁾が見られるが、女子留学生に関するものは佐喜本愛の「九州帝国大学女子留学生に関する一考察」⁽⁴⁾と所澤潤による史料紹介⁽⁵⁾しかなかった。

筆者は、女子留学生を受け入れたすべての帝国大学を対象とし⁽⁶⁾、人数、在籍身分、専攻、出身校などを分析することから、その全体像に迫りたいのである。

方法としては、名簿整理から着手し、「帝国大学における中国人女子留学生名簿（1924-1944 年）」（「附録」を参照）を作成した。この名簿は、主に日華学会が編纂した 1927-1944 年度の「中国留日学生名簿」（以下日華学会『名簿』と略称）を使用し作成したが、他には、外務省外交史料館に散在している関連資料などを参考とし、4 名の女子学生と関連データを補充した。

本稿は「附録」の名簿に集計されている女子留学生 76 名のデータを解読し、その事例を分析して、帝国大学における中国人女子留学生の実態幾つかの側面を明らかにする。更にその留学の特徴と意義、及び歴史的な位置づけも究明する。

本稿の一部は、中国の『聊城大学学报』に発表した「日本帝国大学における中国人留学生の中の女性（1924-1937 年）——データ解読と事例分析——」⁽⁷⁾の要約と翻訳である。同論文では留学費用と戦時下の状況については触れておらず、本稿ではそれらを含め中国人女性の帝国大学留学の全体像を考察するものである。

本稿の各表の出典は、すべて「附録」の「帝国大学における中国女子留学生名簿（1924-1944 年）」によるものである。

一．独自の発展過程

中国人女性の帝国大学（以下帝大と略称）留学は、中国人日本留学全体の流れから見るとかなり遅くに始まったが、独自の発展過程を辿った。

1920 年に東京帝大文学部で女子学生の入学を許可する『聴講生規程』が制定され⁽⁸⁾、女性が東京帝大で学ぶことが可能となった。最初の中国人女子留学生は、1924 年に東京帝大文学部に聴講生として入学した鄭聡貽である。彼女は東京女子高等師範学校の卒業生であり、東京帝大文学部服部宇之吉教授の推薦で同大文学部教育学科聴講生となり、在学籍期間は 1924-1925 年であった⁽⁹⁾。

中国人女性の帝大留学は、人数変動、出身校、特徴などから四段階の時期区分ができる。

（一）第一段階（1924-1929 年）：始動期

第一段階の女子留学生は 4 名であり、全員東京帝大に在籍していた。鄭聡貽（1924 年入学）と周慈好（1927 年入学）には共通点が多く、ともに文学部教育学科の聴講生であり、福建省出身、東京女子高等師範学校の卒業生、「対支文化事業」の補給留学生であった。1926 年に在籍していた阮徳和と余竹軒は医学部産科婦人科の選科生であり、二人とも広東省の光華医学校の卒業生であった。

（二）第二段階（1930-1933 年）：発展期

第二段階では、東京帝大だけではなく、東北帝大や九州帝大も中国人女子留学生を受け入れ、京都帝大大学院にも中国人女性が在籍していた。女子学生の人数が増え、出身校や在籍身分及び専攻などに多様性が見え始めた。

この時期に帝国大学に入学した中国人女子学生は 7 名であり、日本で女子高等・専門教育を受けた者が多数であったが、中国の大学の出身者もいた。1930 年に九州帝大農学部は南京国立中央大学農学院出身の女学生を専攻生として受け入れた。1931 年に北京師範大学高師部化学系出身の何学寛は、東北帝大に入学した。日華学会『名簿』に何学寛の在籍身分は記されていないが、東北帝大理学部化学教室に所属しているとの記述があり、研修の立場で在籍していたのではないかと推測できる。1931 年には九州帝大に正科生として朱毅如が入学し、彼女は初めての帝国大学の中国人女子本科生となった。佐喜本論文には朱毅如に関する詳細な論述がある⁽¹⁰⁾。

他方で特別なケースとも言えるが、この時期に帝大大学院にも中国人女子学生（陶慰孫、1930-1931 年）が在籍していた。京都帝大大学院院生の陶慰孫は、他の女子留学生と違い、幼少期から家族とともに日本で暮らして教育を受け、1918 年に東京女子高等師範学校を卒業した。彼女は卒業してから中国に戻り、しばらく教鞭を執ったが、その後アメリカへ渡り、コロンビア大学で修士学位を獲得した。1927 年にふたたび来日し、京都帝大で副手となり、研究を行っていた⁽¹¹⁾。日華学会『名簿』による

と、彼女は 1928 年度に副手、1930-1931 年度に大学院生として記録されている。

第一段階と第二段階の女子留学生は、人数は少なかったが、その多くは補給留学生であった。留学費用については第三章で後述する。

(三) 第三段階（1934-1937 年 7 月）：最盛期

第三段階の帝大中国人女子留学生には以下の三つの特徴がある。

1. 人数の急増

1934 年から帝大の女子学生数は増加していき、各年度の在籍数は 1934 年 14 名、1935 年 32 名、1936 年 38 名、1937 年 29 名であった。この現象は、1930 年代中期における第三次日本留学ブーム⁽¹²⁾の留学生数増加の傾向と一致しており、同ブームの原因はさまざまあったが、一番の要因は銀価の上昇であった。当時日本は金本位制であったが、中国は銀本位制を採用していた。金の価格が下がり、銀が上昇したので、中国で勉強するよりも日本で学ぶ方が安価な状態となったのである。『申報』1934 年 11 月 5 日の報道によると「2-3 年前は 100 円のレートが 200-300 元だったが、最近 70-80 元となり、上海で勉強するよりも日本のほうが安くつき、2-3 年前と比べ、留学費用は三分の一に減少した」⁽¹³⁾。日華学会『名簿』第十版の「例言」には、「昭和八年秋季より渡来者漸増、銀為替好転も伴ひ九年十年と更に増勢顕著となり、就中十年秋初に入り一大飛躍を為し、十一月には留日学生数約八千を突破せんとする勢を示したる」⁽¹⁴⁾と記録されている。この時期には帝国大学の中国人留学生数も急増し、女子留学生も例外ではなかった。

2. 中国の高等教育機関出身者が多い

「附録」の名簿から分かるように、第三段階は女子留学生の人数が増え（59 名、1933 年 9 月の入学者 1 名）、中国人女性帝大留学の最盛期であった。59 名中 48 名の出身校は中国の大学や高等専門学校であり、この背景には中国女子高等教育の発展があった。1920 年に北京大学が初めて女子学生の入学を許可してから、次第に他の大学も女子学生を受け入れるようになった。中国の高等教育司の統計によると、1928-1929 年の各大学学生総数 1 万 7285 人中女子学生は 1485 人であり、8.6% を占めていた⁽¹⁵⁾。1931 年には各大学学生総数は 2 万 7096 人にのぼり、その中の女子学生は 3315 人までに増加し、比率は 12.2% を超えていた⁽¹⁶⁾。中国の高等教育の発展、特に女子高等教育のある程度の普及は、中国人女性が帝国大学へ留学するのに必要な学力の基礎を築いた。

3. 多数を占める専攻生

第三段階の女子学生の在籍身分から見ると、専攻生が極めて多かった。これは中国人女性の帝大留学の重要な特徴であり、第二章で詳述する。

(四) 第四段階（1937 年 7 月-1944 年）：衰退期

1937 年 7 月に日中戦争が勃発し、留学生の殆どが帰国し、第三次留日ブームは消滅した。中国人女性の帝大留学も例外ではなかった。戦時下の 8 年間に、帝大に入学した女子留学生は合計で 8 名（1945 年はデータがない）であり、その中の 1 名は戦前から在籍していた留学生の再入学であった。郭劍児は九州帝大の元専攻生であったが、日華学会『名簿』の記録では 1944 年に東北帝大の専攻生とされている。また、彼女は調査時点の同年 4 月には帰国中を意味する「○印」が付いているので、すでに帰国していたと思われる。

他には、1938 年度名簿に京都帝大の 1 名（徐文綺）が記録されているが、入学時期の記録はなく、

○印が付いているので 1938 年度に在籍しているものの登校していないことが確認できる。日中戦争が勃発した 1937 年 7 月 7 日以降に留学生が来日することは考えにくいので、徐文綺の入学時期は、日華学会が留学生の調査をおこなった同年 6 月から 7 月初旬頃と推察される。

京都帝大の帰国中の 1 名を除くと、第四段階の女子留学生は東京帝大の 2 名のほかは、東北帝大の 3 名と北海道大学の 2 名であり、日本の北の方に集中している。

二. 在籍身分

帝大は入学試験が難しく、学生のレベルが高いことは、共通認識であった。しかし、帝大には「学生」と呼ばれる学部生と大学院生以外に、「生徒」と呼ばれる聴講生、選科生、研究生などがいた。その人数は少なく、入学基準や試験の有無は各帝大あるいは専攻により異なっていた。在籍身分の違いにより、学生のレベルにはかなりの差があり、それは留学生も例外ではなかった。

(一) 在籍身分の種類

日華学会『名簿』は、1931 年度から「程度」という在籍身分ごと統計を取り始め、その分類は徐々に詳細になっていった。1936 年度の統計では、帝大は 7 つの分類（大学院、学部、選科、専攻、介補、聴講と予科）があり、それは留学生の在籍身分によるものであった。日華学会『名簿』の分類基準に沿って女子学生の種類を〈表 1〉にまとめた。5 名の在籍身分は記載されていなかったのもので、不明欄に入れた。

〈表 1〉から分かるように、中国人女子留学生には「学生」がきわめて少なく、8 名しかいなかった。

各帝大によって女子学生を受け入れる方針が異なり、一番早く女子学生を受け入れたのは東北帝大であった。九州帝大は 1925 年に女子学生を受け入れる方針を定め、法文学部の入学資格に女子高等師範学校を追加した⁽¹⁷⁾。帝大の中国人女子留学生は、1930 年代に学部生が 2 名おり、九州帝大の朱毅如（1931 入学、法文学部、大阪梅花女子専門学校出身）と東北帝大の唐韞瓊（1936 年入学、法文学部、中央大学出身）であった。二人とも入学前に日本の教育機関で教育を受けた者であり、法文学部の学生で

〈表 1〉各帝大中国人女子学生の身分類別人数表（1924-1944 年）

大学名	大学院	学部	聴講	選科	専攻	介補	その他	不明	合計
東京帝大	1(法)		4(3 文 1 理)	2(医)	14(医)	2(農)	1(文) 研究生	2(農)	26
京都帝大	1(理)				1(医)専修科		1(文) 嘱托		3
東北帝大		3(法文)			4(法文、内 1 名 元九州専攻生)			3(2 理 1 法文)	10
九州帝大		1(法文)			24(12 農、6 法 文、6 医)		3(農) 実習員		28
北海道帝大		2(理)	1(理)						1
大阪帝大				7(5 医、 2 工)	1(工、元選科生)				10*
合計	2	6	5	9	44*	2	5	5	78*

* 延べ人数。東北帝大専攻生の 1 名は元九州帝大の専攻生、大阪帝大の専攻生の 1 名は元選科生であったため、女子学生の合計実数は 76 名である。

あった。戦時下の1943年に東北帝大法文学部に2名と、北海道帝大化学専攻に中国燕京大学から2名の女子留學生が入学した。しかし、帝国大学としての歴史が最も長い東京帝大と京都帝大の学部は、なかなか女子學生に門戸を開くことがなかった。

山本美穂子の調査によると、1918-1945年の間に帝大大学院には20余名の女子學生（陶慰孫は含まれず）しか在籍していなかった⁽¹⁸⁾。帝大大学院に女子學生が珍しい状況の中で、1930年代には二人の中国人女性が帝大大学院生となった。陶慰孫と韓桂琴が帝国大学の大学院生となれたのは、二人の特別な学歴や研究経歴及び勇気のある行動によるものであろう。

前述したように陶慰孫（1895-1982年）は、京都大学に来る前に、すでにアメリカで修士学位を取得していた。その後、ヨーロッパ化学研究機関で研修し、帰国後、しばらく上海大同大学に勤めた⁽¹⁹⁾。陶慰孫の京都帝大の指導教官であった理学博士小松茂「理学博士 陶慰孫女史を語る」によると、陶は1927年再び来日し、同年から1931年秋まで京都帝大理学部の副手として研究を行っていた⁽²⁰⁾。陶慰孫は1930-1931年に京都帝大に大学院生として在籍し、1932年7月に「米澱粉の生化学的研究」の論文で理学博士を取得した。陶慰孫は京都帝大唯一の女子大学院生であり、日本で初めて博士学位（1932年）を取得した中国人女性である。

韓桂琴（韓幽桐、1908-1985年）は1932年に北平大学法商学院を卒業後、来日した。日華学会『名簿』によると、韓桂琴は1933年早稲田大学政経学部の大学院生を経て、1934-1937年に東京大学法学部の大学院生となった。所澤潤の「東京大学における昭和二十年（1945年）以前の女子入学に関する史料」には韓桂琴と関係のある資料が多く、「韓桂琴の大学院入学は、東京帝国大学の女子入学の一つの転機となった」⁽²¹⁾と指摘する。彼女の大学院入学の申請が大学評議会や法学部教授会を動かし、制度面で東京帝大大学院の門戸が女性に開かれるという結果につながった。その後、東京帝大には日本人の女子大学院生も在籍するようになった。

所澤潤の研究と韓桂琴の回想録⁽²²⁾によると、韓は1934年に東京帝大大学院の入学試験に合格し、大学院生となった。研究課題は中ソ関係であり、在学中に「最近中ソ外交史」と「最近中ソ外交史統篇」という論文を書いた。さらに指導教官である横田喜三郎教授の『国際法』という著作を中国語に翻訳し、商務印書館から出版した。東京帝大の留學生出動調査等の記録から、韓桂琴は盧溝橋事変直後の1937年7月10日に帰国したとされている。

帰国後の陶慰孫と韓桂琴は、それぞれ生物化学と法学の分野で顕著な成果を上げ、中国の著名な生物化学と法学専門家となった。

（二）専攻生

1. 帝国大学専攻生制度と留學生専攻生

山本美穂子の「北海道帝国大学の専攻生制度について」では、東京帝大以外の6帝大の専攻生制度の創設過程及び内容について詳述しており、その性質について次のように指摘している。「専攻生制度は、大学院學生とは別に、研究（攻究）を志望する大学卒業生・専門学校卒業生を学部において受け入れる制度であった」⁽²³⁾。同論文の表4「専修科・専攻生に関する規定一覧（1919～1942年）」と表5「専攻生を規定した帝国大学と規定名一覧（1919～1939年）」には、東京帝大以外の6帝大の専攻生規定の主な内容がまとめられている。二つの表から、それぞれの帝大の専攻生制度は、一部の学部の制度であり、入学資格も一律ではなく、入学料も「研究料」⁽²⁴⁾もさまざまであったことがわかる。入学条件から見ると、京都帝大医学部にのみ「学力を検定」する規定があり、他の帝大の専攻生規定には学力検定に関する規定がなかった。

留學生専攻生に関しては前述の九州、東北、北海道帝大留學生の研究で論じられている。陳昊「九州帝国大学における留學生受け入れ」では、九州帝大の専攻生のレベルは大学院生よりすこし低く、「准

大学院生」⁽²⁵⁾と言える定義付けている。東北帝大と北海道帝大の専攻生については、永田英明と許晨の研究により、九州帝大と類似した扱いであることが明らかにされている⁽²⁶⁾。

1930年代半ばの第三次留日ブームの時期に留学生数は急速に増えたとともに、帝国大学には専攻生としての入学希望者が急増した。しかし、留学生の場合は、入学資格（大学、専門学校の卒業者など）があっても、日本語能力不足の問題があり、入学後の学習に支障があった。専攻生制度は、本来日本の大学や専門学校などを卒業してから研究を希望する者のための無試験の制度であったが、1930年代半ばに中国の高等教育機関を卒業した留学生専攻生希望者が殺到する局面は想定外のことだっただろう。新しい問題に直面し、複数の帝国大学の学部がそれに対応する措置を取った。東北帝大法学部では1936年5月より「中華民国学生特別講習会」を開講し⁽²⁷⁾、九州帝大法学部は「日本語の口頭試問程度の試験」⁽²⁸⁾を設置し、北海道帝大農学部は専攻生希望者に対して日本語能力や学力検定試験を実施した⁽²⁹⁾。

東京帝大の専攻生制度は、医学部にだけ設けられた。東京帝大医学部の留学生専攻生も他の帝大と同様に1930年代半ばに急増した。1934年までは毎年10名を超えたことがなかった留学生専攻生は、1935年26名、1936年と1937年はそれぞれ77名となった⁽³⁰⁾。

1936年の帝大における中国人専攻生の総人数は、学部生（193名）と大学院生（135名）を超え197名となり、種類別の首位となった⁽³¹⁾。

2. 女子留学生専攻生

〈表1〉から分かるように、女子留学生の中では専攻生が一番多く、実数76名中43名（延べ人数：78名中44名）であった。専攻別から見ると、医学専攻生が一番多く、東京帝大の14名、九州帝大6名と京都帝大1名の計21名であった。

大学別に見ると、東京帝大は医学専攻生（14名）が多く、九州帝大は農学専攻生（12名）が多かった。法文学部で学んだ専攻生は、九州帝大（6名）と東北帝大（4名）であった。

在学期間から見ると、1-2年間在学していた者が多かったが、3年以上在籍していた専攻生も数名いた。京都帝大医学部の蔡聯欽（大阪女子高等医学専門学校卒）は1933年9月に入学し、数年間にわたり京都帝大医学部微生物学教室で微生物学と免疫学を研究した。在学中に「ぢふてり——菌ノ特殊培養基ニ就テ」（『日本微生物学病理学雑誌』28巻12号、1934年11月）と「ぢふてり——毒素產生ニ関スル研究」（『日本微生物学病理学雑誌』30巻3号、1936年3月）⁽³²⁾という論文を発表した。1937年に彼女は医学部の副手となったが、1938年の日華学会『名簿』の記録では「○印（帰国中）」とされており、おそらく日中戦争勃発後に帰国したと思われる。

東京帝大の章雪琴は、1934年4月に東京帝大医学部産婦人科の専攻生になり、1937年まで在籍していた。彼女の補助金申請書類に履歴書が含まれており、そこから章雪琴は来日前に中国政府機関衛生関係部門（寧波市政府衛生科、浙江省政府民政庁衛生科、南京衛生署、杭州市政府衛生科）に勤めた経歴があったことがわかる。

蔡聯欽と章雪琴の入学時の年齢は27歳と28歳であり、それは当時の女子専攻生入学時の平均年齢であった。恐らく、中国人女子専攻生の多くは、社会人経験があったのだろう。

専攻生の入学時期は1934-1937年の間に集中しており、第三次留日ブームと同時期である。この時期に来日した留学生は、中国の大学や専門学校などを卒業した者が少なくなかった。ほとんど入学試験がない日本の帝国大学の専攻生制度は、すでに高等教育を受けた留学生たちに、専門知識を深め、更に研究する機会を与えたのである。特に、専攻生制度は、中国人女性にとって教育水準が高い日本の帝大で学べる貴重なルートであった。

写真：1935 年九州帝国大学医学部の中国人女子留学生（専攻生 6 名）



図 5-14 医学部の中国人留学生（1935 年）
正科生ではなく専攻生とみられる。

出典：九州大学百年史編集委員会『九州大学百年史』第 1 巻：通史編 I，2017 年，664 頁。

三. 専攻の選択

（一）1924-1944 年の中国人女子学生の専攻別人数

各帝大が設置した専攻はそれぞれであり，北海道帝大と大阪帝大には文系学部がなかった。東京帝大と京都帝大には文学部と法学部があったが，東北帝大と九州帝大では両専攻がまとめられ法文学部とされていた。故に〈表 2〉には文系を文・法・法文を分けて計上した。

〈表 2〉から 1924-1944 年の帝大の中国人女子学生の専攻は多い順に，医学（28 名），文・法文・法（20 名），農学（19 名）となっている。

中国人の日本留学は明治時代から始まったが，日中戦争勃発前までは，留学生全体の専攻は文系

〈表 2〉各帝大中国人女子学生の専攻別人数表（1924-1944 年）

校 名	分 科							人数合計
	医	法	文	法文	農	理	工	
東京帝大	16	1	4		4	1		26
京都帝大	1		1			1		3
東北帝大				8		2		10
九州帝大	6			7	15			28
北海道帝大						1		1
大阪帝大	5					2	2	9
合計	28	1	5	15*	19	7	2	77*

* 延べ人数。郭剣児は 1930 年代に九州帝大の専攻生であったが，1940 年代に東北帝大の専攻生となった。

(法、文、経、教育など)を中心としたもの⁽³³⁾であった。しかし、帝大の中国人留学生は、戦前は理系(農、医、工、理、水など)専攻者が多く⁽³⁴⁾、女性も例外ではなかった。

戦時下に帝大に入学した女子留学生は、文系専攻が多かったものの、全体的に見ると、76名の女子学生のうち理系専攻者が56名であり、文系は20名しかいなかった。これは帝大留学生の特徴の一つと言えよう。この特徴は、6帝大の専攻設置と深く関わっていると考えられる。北海道帝大と大阪帝大には文系がなく、帝大全体から見ても理系専攻に対して文系専攻は少なかった。

(二) 専攻の選択—入学前に学んだ専門の継続が主流—

帝大の中国人女子留学生の在籍身分は専攻生が多数を占めており、この特徴は専攻選択と深く関連していた。

専攻生の入学条件の一つは、大学や専門学校の卒業生であることで、そのため専攻生は全員帝大に入学する前にすでに自分の専門を持っていた。帝大の専攻生の殆どは、自分が持っている専門知識を深め、研究を続けるために帝大の関連学部に入學した。専攻生だけでなく、大学院生や聴講生及び選科生も似通った状況であり、学部生を除いて、帝大留学生の専門選択は殆ど入学前の専門を継続するものであった。この特徴は、専攻生制度の性質からもたらされた必然的な結果であるが、学部生がごくわずかで専攻生が多かった女子留学生の場合は特に際立っている。

女子医学専攻生は、すべて医学関係の大学及び専門学校の出身者だと考えられる(出身校の記録がないのは1名;北平大学出身4名のうち医学院と明記していないのは2名)。出身校別から見ると、人数が一番多かったのは浙江省立医薬専門学校(5名)であり、次は北平大学(4名)と東京女子医学専門学校(4名)であった。他には、広東光華医学校、大阪女子高等医科専門学校、江蘇南通医科大学、東南医学院、河北医学院和上海同德医学院などの出身者もいた。

12名の農学女子専攻生はすべて九州帝大に在籍しており、蚕糸学を学んだ者が多かった。12名中7名が養蚕関係学校の出身者で、浙江省立高級蚕桑学校の出身者が6名であった。農学部には12名の専攻生以外に3名の実習員も在籍しており、3名中2名も蚕糸学校の出身者であった。

九州帝大農学部の15名の中国人女子留学生以外に、東京帝大農学部にも4名の女子留学生が在籍していた。

大阪帝大の女子留学生7名は、殆ど選科生であり、医学は5名で、工学は2名であった。5名の医学選科生のうち4名の出身校は江西省立医学専門学校で、全員1934年4月に入学した。1936年度に入学した工学選科生の1名は1937年度に専攻生となった。

帝大の中国人女子学生は、同じ学校の出身者が多いのが目立ち、出身校の同級生の間で日本留学の情報を交換することがあったと推測できる。大阪帝大だけではなく、九州帝大農学部にも1935年に浙江省立高級蚕桑学校出身の5人が一緒に入学した。この現象から分かるように、清朝末期から日本留学の「家族、親族、同級生、友人とともに」という特徴は、相変わらず存在していた。

女子留学生の出身校や専門分野から分かるように、殆どの女子留学生は帝大に入学する前にすでに自分の専門を持ち、入学後の専攻選択はその延長であった。

四. 経費について

帝大の中国人女子留学生は、私費留学生が多かった。給費生は13名しかなく、その中の12名は「対支文化事業」留学生補助制度の補給留学生であった。

女子給費生の詳細は〈表3〉の通りである。

〈表3〉から分かるように、女子留学生の給費生はほとんどが「対支文化事業」の補給生で、それ以

〈表3〉帝大中国人女子留学生の給費生名簿（1924-1944年）

	姓名	費別	年度	校別	専攻	在籍身分
1	鄭聡貽	補給	1924-1925	東京	教育	聴講生
2	周慈好	補給	1927	東京	教育	聴講生
3	陶慰孫	補給・特選 特選・補給	1928-1929 1930-1931	京都	理	副手 大学院生
4	霍淑英	補給	1930	九州	法文	専攻生
5	鄭推先	補給	1931	東京	医	専攻生
6	肅忠	補給	1931-1932	九州	農	専攻生
7	韓桂琴	選抜 特選	1934-1936 1937-1938	東京	法	大学院生
8	蔡聯歆	選抜	1934-1936	京都	医	専修科生
9	章雪琴	特種 選抜	1935 1936	東京	医	専攻生
10	安楚璵	選抜	1935-1937	東北	理	不明
11	鄒儀新	公費	1936	東京	理	聴講生
12	于飛瀾	選抜	1937-1938	大阪	工	専攻生（元選科生）
13	楊鳳喈	補給	1943-1944	東北	文	学部生

外は公費生の1名しかいなかった。

（一）補給留学生

庚子賠償金（義和団事件賠償金）の一部を利用した中国人留学生への補助制度は、1923年から「対支文化事業」の一環として始まった。日本政府は当初この文化事業を日本側単独の事業として実施する考えであったが、中国側の反発を受けて、日中両国による共同運営の形をとることになった。補給留学生は、大別して「一般補給留学生」（中国教育部主導）、「選抜補給留学生」（日本側の単独選考、1926年開始）、「特選留学生」（大学院生レベルを対象、学長、学部長の推薦）の3種類に分けられた。

1924年3月に中国教育部が公布した『日本対華文化事業補助留学生学費分配弁法』（以下『分配弁法』と略称）は、補給留学生の選出基準であり、男女の別なく、学校の評価順と各省の定員により、学校在籍者から受給者を決定するものであった。学校の順位は甲、乙、丙、丁等8類に分けられ、帝大は甲類の官立学校中の首位であり、帝大留学生が補給留学生の選出では優位であった。

1931年までの帝大の女子留学生10名中の6名は補給留学生であり、補給留学生の比率が高かった。『分配弁法』には教育部の補給生の定員は11名と規定されているが、1924年の教育部補給生は1名しかいなかった。その1名は鄭聡貽であり、彼女は翌年1925年度も教育部補給生であった⁽³⁵⁾。

この「事業」をめぐる、日中両国政府の摩擦や衝突が終始絶えず、最終的には決裂することとなった。1929年に国民政府は日中共同文化事業協定を廃止し、庚子賠償金を中国に返還するように要求したが、日本政府が拒否したため、1930年7月に駐日留学生監督処に補給留学生の選抜を停止する訓令を発令した⁽³⁶⁾。

拙著『近代中国人日本留学の社会史——昭和前期を中心に』の表8-5「学費補給留学生人数（1929-1939年）」⁽³⁷⁾からわかるように、1930年代初頭から国民政府が補給留学生の選抜を停止したため、

1931-1937年まで一般補給留学生の数は減り続け、代わりに選抜補給留学生の数が大幅に増えた。1936-1937年の2年間に一般補給留学生は7名しか残っておらず、一般補給留学生の制度はほとんど崩壊状態となった。しかし、1938年から一般補給留学生は徐々に増え始めた。それは華北などの地域の傀儡政府が留日学生を派遣し始めたためである。

〈表3〉から分かるように帝大の女子補給留学生は6名であり、1932年までに集中していた（1名は、戦時下に来日した者）。日本単独選定の女子選抜補給生は5名であり、全員1934年以降の在學生であった。女子留学生のデータからも1930年代初期に始まった一般補給と選抜補給留学生の入れ替わりの傾向が読み取れる。

女子補給留学生3名は、2種類の補給費が支給され、京都帝大の陶慰孫（補給、特選）と東京帝大の韓桂琴（選抜、特選）、章雪琴（特種、選抜）であった。

陶慰孫については、日華学会『名簿』では1928年度に「副手、補給」、1930-1931年度に「大学院生、特選、補給」と記録されていたが、外務省記録「最近ニ於ケル文化事業ノ概要」（外務省文化事業部、昭和3年10月20日調）の「特選支那留学生氏名、研究場所及研究事項」⁽³⁸⁾により、陶慰孫が1928年10月現在に特選留学生であったことが判明した。1929年度については、日華学会『名簿』（調査時期6月）では陶慰孫の名は確認できていない。

「最近ニ於ケル文化事業ノ概要」には、特選留学生の選抜方法（大学総長及学部長等より推薦）、対象（専門教育の課程修了後更に本邦に在りて學術の蘊奥を究めむとする者）、開始時期（1924年）及び1928年度の人数（19名）などが詳しく記載されている⁽³⁹⁾。

東京帝大大学院生の韓桂琴は、1934-1936年度は選抜補給留学生であり、1937-1938年度は特選留学生（日華学会『名簿』の記録）であったが、実際は1937年7月10日にすでに帰国していた⁽⁴⁰⁾。当時特選留学生としての韓桂琴の支給状況について、所澤潤は「そのため〔1937年〕12月になって補給は停止されることになった。外務省から特選留学生として更に一年学費支給されることになっていたもので、戦争のため留学継続を断念したことがわかる⁽⁴¹⁾」と説明している。この事例から、外務省が年度途中で帰国した補給留学生に対してとった措置の一側面が見られる。

外務省外交史料館に所蔵されている補給留学生に関する資料から、「対支文化事業」中の留学生援助は、「補給」「選抜」「特選」の三種類の補給制度以外に、臨時的に各種の手当や学費援助などの補助金制度も設けたことがわかる。東京帝大医学部専攻生章雪琴が1935年に支給された特種補給もその中の一つであった。章雪琴の特種補給期間は1935年11月から1936年3月までの5か月で、支給された金額は合計300円であり、学費全額に相当する補給金が支給された⁽⁴²⁾。特種補給留学生については、張一聞の「中華民国留日学生の経費不足と日常生活」で言及されているが、4名しかなかったようである⁽⁴³⁾。

（二）公費生—鄒儀新の場合—

鄒儀新（1911-1997年）は1936年度に聴講生として東京帝大に在籍していた。筆者は1994年夏に彼女の自宅を訪ねたことがあり、以下の内容は、鄒儀新へのインタビュー記録と彼女からの手紙など⁽⁴⁴⁾によって整理したものである。

鄒儀新は中山大学に派遣された「有給留学」（帯薪出国）の公費生⁽⁴⁵⁾であり、来日前に中山大学数学天文系の助教兼天文台の技術補佐であった。彼女は1935年4月から1936年7月まで日本に滞在し、支給された給料は月額120円であり、学習や生活の費用は余裕があったという。来日後、東京菊水下宿館に住み、大黃学社で日本語を学び、時には日本語を学ぶために日本語講師も雇っていた。

鄒儀新は、東京帝大と東京天文台で緯度観測と時間精測を研究していたが、東京天文台の早乙女清房

教授から指導を受けていた。彼女は自分の日本での研究について、中山大学から期待された結果を達成したと評価し、それに早乙女教授と東京天文台のスタッフとの深い友情を今でも鮮明に覚えていると述べた。

帰国後の鄒儀新は、中山大学の講師、副教授、中山大学教授で務め、いくつかの研究機関で研究を進めた。1948年に国際天文台協会（IAU）から資金提供を受け、グリニッジ天文台で研修し、英国の王立天文学会（FRAS）の特別会員になった。1949年に、英国特別奨学金を授与され、エジンバラ天文台とケンブリッジ天文台で研修や仕事をした。中華人民共和国建国後の鄒儀新は中国科学院紫金山（パールマウンテン）天文台で実用天文学グループのリーダーおよび研究者を務めた。1957年にソビエト連邦に留学中、彼女と国際天文学会の緯度変化委員会の委員長であるフェドロフは、測定器の新しい方法を作成し、効率を2倍にした。そのため、鄒儀新は国際天文協会の会員として推薦された。その後、中国科学院の天津緯変所の初代所長を務め、1970年に北京天文台に転勤し、定年まで勤めた。鄒儀新は、天文学の分野で多くの研究者を育て、中国で天文学の研究に従事した女性科学者の第一世代であった。

おわりに—中国人女性日本留学の新段階—

中国人女子留学生の帝国大学への進学は1924年から始まり、その数は多くはなかったものの、女子留学生の教育水準が高くなったことを示していた。初等・中等教育が主であった清末から高等教育へ移行し始めた民国初期を経て、1920年代半ば、中国人女性の日本留学は帝国大学を含む高等教育を中心とした新しい局面を迎えた。また、近代中国の女性教育における日本留学の位置づけも、教育上重要なかつ不可欠なものから、高等教育の補助的な手段へと変化した。

1920年代初めごろから中国の大学が女性に門戸を開放し、女性の大学生の数は徐々に増え、1930年代に急速に増加した。第三次日本留学ブームの時期に来日の留学生の中には高学歴の女性が少なくなかった。中国の高等教育の発展、特に女子高等教育のある程度の普及は、中国人女性が帝国大学へ留学するのに必要な学力の基礎を築いた。これは、中国人女性が帝大に入学するための前提条件であった。

帝国大学における中国人女子留学生は、本科生と大学院生が極めて少なく、専攻生が主流であった。彼女たちの多くは、帝国大学に入学する前にすでに高等教育を受けており、帝国大学の専攻生制度は、高学歴の中国人知識人女性に再学習と研究を深めるチャンスを提供した。

中国人女性の日本留学は、中国国内の女性教育の発展と非常に密接な関係があり、お互いに影響し合った。大学院生2名の事例分析から、中国人女子学生の努力が、日本帝国大学的女子学生入学制度の改革を促進した側面があったことがわかる。

本稿では帝国大学の中国人女子留学生の名簿整理と事例分析を通じて、発展過程、人数、身分、専攻及び特徴などを明らかにし、その全体像に迫った。帝国大学における中国人留学生に関する研究の一助となれば幸いである。

注

(1) 拙著『中国人女性の日本留学史研究』図書刊行会、2000年。

(2) 永田英明「東北帝国大学における女子学生・女性研究者」『東北大学史料館紀要』第9号、2014年3月。

(3) 折田悦郎（研究代表者）：科学研究費補助金研究成果報告書『九州帝国大学における留学生に関する基礎的研究』九州大学、2004年3月。

永田英明「戦前期東北大学における留学生受入の展開——中国人学生を中心に——」『東北大学史料館紀要』創刊号、2006年3月。

許晨「北海道帝国大学の中国人留学生」『北海道大学大学文書館年報』第5号、2010年3月；「北海道帝国

- 大学における中国人留学生の留学生活」『北海道大学大学文書館年報』第6号，2011年3月。
- 拙論「帝国大学における中国人留学生（1927-1937年）——人数・専攻・類別——」日本大学理工学部『一般教育教室彙報』第108号，2020年4月，43-53頁。
- 大里浩秋「東京帝国大学の中国人留学生関係文書を読む」孫安石／大里浩秋編著『明治から昭和の中国人日本留学の諸相』東方書店，2022年。
- (4) 佐喜本愛「九州帝国大学女子留学生に関する一考察」，折田悦郎：（研究代表者）科学研究費補助金研究成果報告書『九州帝国大学における留学生に関する基礎的研究』。
- (5) 所澤潤「東京大学における昭和二十年（一九四五年）以前の女子入学に関する史料」，「『外国人留学生取扱ニ関スル調査委員会』（昭和十七〔一九四二〕年・東京帝国大学）の記録」『東京大学史紀要』第9号，1991年3月。
- (6) 名古屋帝大，台北帝大，京城帝大については，中国人女子留学生の在籍が確認できていないため，本稿では対象としない。
- (7) 「日本帝国大学中国留学生中の女性（1924-1937年）——数拠解読と個例分析——」『聊城大学学报』2022年第1期，18-29頁。
- (8) 東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史 通史二』東京大学，1985年，248頁。
- (9) 前掲，拙著『中国女性の日本留学史研究』126，129頁を参照。
- (10) 前掲，佐喜本「九州帝国大学女子留学生に関する一考察」6-10頁。
- (11) 小松茂「理学博士 陶慰孫女史を語る」『女博士列伝』財団法人科学知識普及会，1937年7月，215頁。
- (12) 第三次日本留学ブームについては，最近の研究として高田幸男「近代における中国人の日本留学——1935，36年の日本留学ブームを中心に——」（『歴史学研究』第1018号，2022年1月）の論文がある。
- (13) 「留日学生激増 匯兌低落為最大原因」『申報』1934年11月5日。
- (14) 昭和11年6月現在『第10版 留日学生名簿』財団法人日華学会学報部，（1936年度）。
- (15) 王雲五『最近三十五年之中国教育』上海商務印書館，1931年，200頁。
- (16) 「(2) 全国20年度各大学之概況（根拠各校之填報）」『第一次中華民國教育年鑑』上海商務出版社，1934年。
- (17) 前掲，佐喜本「九州帝国大学女子留学生に関する一考察」2頁。
- (18) 山本美穂子「1918-1945年における帝国大学大学院への女性の進学状況（一）——化学専攻の進学者に着目して——」『北海道大学大学文書館年報』第13号，2018年3月；「1918-1945年における帝国大学大学院への女性の進学状況（二）——法学専攻の進学者に着目して——」『北海道大学大学文書館年報』第14号，2019年3月。
- (19) 張徳安「陶慰孫伝記」『関夷之，陶慰孫百年誕辰記念文集』吉林大学出版社，1996年，第4頁。
- (20) 前掲，小松「理学博士 陶慰孫女史を語る」215頁。
- (21) 前掲，所澤「東京大学における昭和二十年（一九四五年）以前の女子入学に関する史料」76頁。
- (22) 韓幽桐「東大法学部研究室での五年間」人民中国雑誌社編『わが青春の日本 中国知識人の日本回想』東方書店，1982年，122頁。
- (23) 山本美穂子「北海道帝国大学の専攻生制度について」『北海道大学大学文書館年報』2014年9月，38頁。
- (24) 同上，26-27頁。「研究料」は専攻生の学費と考えられる。
- (25) 陳昊「九州帝国大学における留学生受け入れ——専攻生を中心に——」8頁，折田『九州帝国大学における留学生に関する基礎的研究』。
- (26) 前掲，永田「戦前期東北大学における留学生受入の展開」19-20頁；前掲，許晨「北海道帝国大学の中国人留学生」35，54頁。
- (27) 前掲，永田「戦前期東北大学における留学生受入の展開」14頁。
- (28) 前掲，陳昊「九州帝国大学における留学生受け入れ」11頁。
- (29) 前掲，山本「北海道帝国大学の専攻生制度について」36-37頁。
- (30) 前掲，拙論「帝国大学における中国人留学生（1927-1937年）」8頁。
- (31) 同上，6頁。
- (32) 「2. 京都帝大」昭和11年（1936年）5月26日（外務省記録『在本邦留学生調査関係雑件 第九卷』JACAR. Ref.B05016135900）。
- (33) 前掲，拙著『中国女性の日本留学史研究』250-251頁。

- (34) 前掲, 拙論「帝国大学における中国人留学生 (1927-1937 年)」5 頁。
- (35) 外務省文化事業部「大正十三年度学費補給支那留学生ノ概況」大正 13 年 (1924 年) 12 月 27 日 (外務省記録『在本邦留学生補給実施関係雑件』, JASAR.Ref.B05015411600)。
- (36) 阿部洋『対支文化事業の研究』汲古書院, 2004 年, 607 頁。
- (37) 拙著『近代中国人日本留学の社会史——昭和前期を中心に』東信堂, 2020 年, 116 頁。
- (38) 外務省文化事業部「最近ニ於ケル文化事業ノ概要」昭和 3 年 (1928 年) 10 月 20 日調, 12 頁 (外務省記録『参考資料関係雑件』第 1 巻, JACAR.Ref.B05016150500)。なお, 同資料の存在は潘吉玲「『特選留学生』学費補給制度 (1924-1940 年) に関する研究」(『次世代論集』No. 3, 早稲田大学 地域・地域間研究機構, 2018 年 3 月) により判明した。
- (39) 外務省文化事業部「最近ニ於ケル文化事業ノ概要」昭和 3 年 (1928 年) 10 月 20 日調, 10 頁。
- (40) 前掲, 所澤「東京大学における昭和二十年 (一九四五年) 以前の女子入学に関する史料」79 頁。
- (41) 同上。
- (42) 外務省文化事業部「特種留学生ニ関スル補給 (3) 章雪琴」昭和 10 (1936 年) 年 11 月 15 日 (外務省記録『日華学会関係雑件／補助関係』第 2 巻, JACAR.Ref.B05015271700)。
- (43) 張一聞「中華民國留日学生の経費不足と日常生活」『アジア教育史研究』28・29 巻, 2020 年 3 月, 65-66 頁。
- (44) 1994 年 8 月 27 日, 筆者の鄭儀新へのインタビュー記録; 1994 年 7 月 30 日付鄭儀新からの手紙; 『華夏婦女名人詞典』華夏出版社, 1988 年, 490-491 頁。
- (45) 「留日学生学費別表」備考欄に, 公費は「官費ハ省県, 公費ハ校費, 満鉄, 旗費, 奨励金等ヲ含ムモノトス」と分類されている (昭和 10 年 6 月現在『第九版 留日学生名簿』日華学会広報部 (1935 年度) 18 頁)。

「附録」 帝国大学における中国女子留学生名簿 (1924-1944 年)

凡例:

本名簿のもととなる主な資料は, 日華学会作成の 1927-1944 年度「中国留日学生名簿」(以下『名簿』) である。日華学会『名簿』は年度により, 統計内容や形式などに相違があるので, 本名簿では以下のように統一する。年齢は入学年度の年齢を記す; 省籍は省のみを記入し, 県・市などを略す; 文化補助費は, 補, 文化補給, 一般文化補給などの記載があるが, 補給, 選抜, 特選に統一する; 年度により名前に違う漢字が使われている場合は, その漢字を () 内に転記する。元資料の元号表記を西暦にする。

○印 (帰国中) の年度は, 元資料のまま転記したが, 大学によって帰国者に○印がない場合 (大阪帝大は 1938 年度帰国者には○印を付さなかった) や, 未確認な部分などもある (東京帝大の韓桂琴の帰国時期)。

日華学会『名簿』は, 主に各学校の報告により集計されるデータなので, 信ぴょう性が高いものの, 在籍していた留学生がすべて網羅されているものではないと考えられる。在籍期間が一年未満の者は入学時期により収録されていない可能性もある (例えば, 日華学会が 6 月に調査を実施する場合, その後の 7 月から翌年 5 月の間に短期間在籍していた者は, 収録されない可能性が高い)。また, 1930 年度までの日華学会『名簿』には性別がわかる記録がなく, 女子学生については出身校が女子校であるかどうかでしか判断できなかった。1930 年度以後も「(女)」の注釈が抜けることもよくあり, すべての女子学生を網羅するのは困難である。

九州帝大名簿の下線部分は, 佐喜本愛「九州帝国大学女子留学生に関する一考察」のデータで補充したものである。

序号	姓名	年齢	省籍	入学年 (月)	学部 (科) 在籍身分	出身学校 (年度 等による不同記録)	費別	在学籍年度	備考 ○印: 帰国中	出典
東京帝大										
1	鄭聰貽		福建	1924	文学部教育学 聴講生	東京女子高等師 範学校	1924-1925 補給	1924-1925		①②
2	阮徳和	23		1926	医学部産科婦 人科学選科生	光華医学校		1926		③④
3	余竹軒	25		1926	医学部産科婦	光華医学校		1926		③④

					人科学選科生					
4	周慈好		福建	1927. 4	教育学聴講生	東京女子高師	補給	1927		⑤
5	鄭推先	26	浙江	1931	医学部医学科 専攻生	東京女子医学専 門学校	補給	1931		⑤
6	韓桂琴	26	河北	1934	法学部大学院	(国立) 北平大 学	1934-1936 選抜 1937-1938 特選	1934-1938	1937. 7. 10 帰国	⑤⑥
7	章雪琴	28	浙江	1934	医学部専攻生	浙江(省立)医 薬専門学校(浙 江医学専門)	1935 特種 1936 選抜	1934-1937		⑤⑦
8	吳淑嫻 (姻)	28	江蘇	1934	医学部専攻生	江蘇南通医科大 学(南通大学医 科)	自費	1934-1935		⑤
9	金慧敏	30	浙江	1934	医学部専攻生	浙江省立医薬専 門学校	自費	1934-1935		⑤
10	何馥貞	27	江蘇	1935	医学部専攻生	東南医学院	自費	1935		⑤
11	王 琴	29	浙江	1935	医学部専攻生	浙江医薬専	自費	1935-1936		⑤
12	繆住 (佳) 南	24	江蘇	1935	医学部専攻生	北平大学(医学 院)	自費	1935-1937		⑤
13	鄭審因	40	浙江	1935	農学部 介補	東京女高師博物 科	自費	1935		⑤
14	龍 儀	24	江西	1935	農学部 介補	北平大学	自費	1935-1938		⑤
15	胡 瑜	27	浙江	1936	農学部	浙江大学	自費	1936-1938	1938 ○印	⑤
16	余筠鐸	31	江蘇	1936	農学部	江蘇省立女蚕業 学校	自費	1936-1938	1938 ○印	⑤
17	梁淑莊	29	江西	1936	医学部専攻生	東京女子医専	自費	1936-1937		⑤
18	岑仲珩	28	浙江	1936	医学部専攻生	東京女子医専	自費	1936-1937		⑤
19	何 彬	29	河北	1936	医学部専攻生	河北医学院	自費	1936		⑤
20	何芸輝	24	浙江	1936	医学部専攻生	浙江(省立)医 薬専	自費	1936-1937		⑤
21	鄒儀新	26	広東	1936	理学部聴講生	中山大学	公費	1936		⑤
22	方肖傑	31	浙江	1937	医学部専攻生	浙江省医薬専	自費	1937		⑤
23	陳壁明	29	浙江	1937	医学部専攻生	上海同德医学院	自費	1937		⑤
24	全亜莉	25	江蘇	1937	医学部専攻生	東京女子医専	自費	1937		⑤
25	夏昭光	24	河北	1939	文学部聴講生	明治大学新聞高 等研究科(ハル ビン東省特別区 区立法政大学)	自費	1939-1941		⑤
26	呂慕昭	25	湖北	1943	文 研究生	北京師範大学	自費	1943		⑤
京都帝大										
27	陶慰孫	30	江蘇		化学教室助手 理学部大学院 学生	東京女子高等師 範学校	1928-1929 補給, 特選 1930-1931 特選, 補給	1930-1931		⑤⑧ ⑨⑩
28	蔡聯歆 (親)	27	広東	1933. 9	医学部微生物 学及免疫学専	大阪女子高医専	1934-1936 選抜	1933-1938, 1940	1938 ○印, 1939 記録な	

					修科生, 1937 年医学部副手				し, 1940 ○ 印	⑤
29	徐文綺	25	浙江	1938	文学部東史嘱 托	天津南開大学		1938, 1940	1938 ○印, 1939 記録な し, 1940 ○ 印	⑤
東北帝大										
30	何学寛	25	湖南	1931. 4	理学部化学教 室	北京師範大学高 師部化学系	自費	1931-1933	1932-1933 ○印	⑤
31	安楚璵	24	浙江	1935. 4	理学部生物学 教室 (理 生 物学)	(国立) 浙江大 学	1935-1937 選抜	1935-1940 ; 1942	1938-1940 ○印	⑤
32	簫素彬	22	四川	1935	法文専攻生	北平朝陽学院	自費	1935-1936		⑤
33	莊孝和	29	山東	1936	法文専攻生	省立女師	自費	1936		⑤
34	張競叔	31	湖北	1936	法文専攻生	郁文大学	自費	1936-1937	1937 ○印	⑤
35	唐韞瓊	28	四川	1936	法文本科	中央大学	自費	1936-1943	1938-1940, 1943 ○印	⑤
36	湯蘭芬	31	江蘇	1937	法文	日本大学	自費	1937		⑤
37	白若愚	24	河北	1941. 4	1941 法文文科, 1942 文 2 年	北京第一女子中 学高中	自費	1941-1943		⑤
38	楊鳳喈	22	江蘇		文 1 年	日本女子大学	1943-1944 補給	1943-1944	1944 ○印	⑤
同 59	郭劍兎	35	広東		法文科専攻生	日本女子大学	自費	1944	1944 ○印	⑤
九州帝大										
39	霍淑英		湖北	<u>1930. 5</u>	法文学部専攻 生 / 国文学	奈良女子高等師 範学校 / 湖北省 立女子師範学校	補給	1930		⑤⑪
40	朱穀如	24	江西	1931. 4	法文学部正科 生 / 法学	大阪梅花女子専 門学校	自費	1931-1934	1930 年文化 補給出願中	⑤⑪
41	簫 忠	26	江蘇	<u>1931. 5</u>	農学部専攻生 / 蚕 / 解剖及 蚕 / 生理	南京国立中央大 学農学院卒 / 早 稲田大学修業	1931-1932 補給	1931-1932		⑤⑪
42	劉天嘯	25	広東	1934. 10	医学部専攻生 / 産婦人科学 一般	南通大学医科	自費	1934-1935		⑤⑪
43	劉 林	22	浙江	1934. 4	農学部専攻生	浙江省立高級蚕 糸学校	自費	1934		⑤
44	李紹宜	25	江蘇	1934. 4	農学部専攻生 / 蚕 / 遺伝, 蚕 / 品種改 良, 蚕体解剖	中央大学女子蚕 業学校高級蚕糸 科	自費	1934-1935		⑤⑪
45	蔣新華	23	浙江	1935. 4	農学部農学科 専攻生 / 蚕体 遺伝, 解剖, 病理	浙江 (省立) 高 級蚕桑学校	自費	1935-1936		⑤⑪
46	朱佩箴	27	浙江	1935. 4	農学部農学科 専攻生 / 蚕体	浙江 (省立) 高 級蚕桑学校	自費	1935		⑤⑪

					遺伝, 生理					
47	王拔群	24	安徽	1935. 4	農学部農学科 専攻生／蚕体 遺伝, 生理	浙江（省立）高 級蚕桑学校	自費	1935-1940	1938-1940 ○印	⑤⑪
48	周仙美	23	浙江	1935. 4	農学部農学科 専攻生／蚕体 遺伝, 解剖	浙江（省立）高 級蚕桑学校	自費	1935-1936		⑤⑪
49	程 照	24	安徽	1935. 4	農学部農学科 専攻生／蚕体 遺伝, 解剖	浙江（省立）高 級蚕桑学校	自費	1935-1940	1938-1940 ○印	⑤⑪
50	何国模	28	湖南	1935. 4	農学部専攻生 ／農業昆虫学	北平大学（農学 院）	自費	1935-1936		⑤⑪
51	項元民	24	浙江	1935. 4	法文学部専攻 生	専修大学高等研 究科正科	自費	1935		⑤
52	宋雯芳	24	河北	1935. 4	法文学部専攻 生／日本近代 文学史	（国立）北平師範 大学（政治系）	自費	1935-1936		⑤⑪
53	歷士 （喬）華	32	浙江	1935. 4	医学部専攻生 ／小児科	北平大学／北平 大学医学院	自費	1935-1936		⑤⑪
54	王濟華			1935. 5	医 内 科 一 般 専攻生			1935- 1937. 3		⑪
55	秦畹香	25	山東	1935. 9	医学部専攻生 ／産婦人科	北平大学	自費	1935-1936		⑤⑪
56	徐幻慧	25	浙江	1935. 9	医学部専攻生 ／産婦人科	北平大学	自費	1935-1936		⑤⑪
57	田怡仙	31	河北	1935. 12	医学部専攻生 ／歯科口腔外 科般	奉天医科専門	自費	1935-1936		⑤⑪
58	王 璋	25	江蘇	1935. 12	農学部専攻生 ／農学経済学	江蘇教育学院	自費	1935-1936		⑤⑪
59	郭劍児	27	広東	1936. 4	法文学部専攻 生／心理学	日本女子大（学）	自費	1936-1940, 1943	1938-1940, 1943 ○ 印； 1941-194 記 録なし	⑤⑪
60	龔梅秀	25	江蘇	1936. 5	農学部実習員	鎮江女子蚕業 （蚕糸）	自費	1936-1937		⑤
61	陸時巧	25	陝西	1936. 5	農学部実習員	上海女子工芸	自費	1936-1937		⑤
62	蔣雪影	24	江蘇	1936. 4	法文学部専攻 生／国文学	日大高等専攻科 ／暨南大学	自費	1936-1937		⑤⑪
63	徐 崢	26	河北	1936. 5	法文学部専攻 生／西洋近世 史	北平師範大学	自費	1936		⑤⑪
64	張敏和	27	江蘇	1937. 5	農学部専攻生 ／蚕ノ遺伝, 蚕 ノ生理, 蚕 ノ品種改良, 蚕 体解剖	江蘇女高蚕 37 ／江蘇省立女子 蚕業学校高級養 蚕科	自費	1937-1940	1938-1940 ○印	⑤⑪
65	馮之勵 （勵）	26	四川	1937. 5	農学部専攻生 ／農学経済	甘肅学院農科／ 甘肅省立学院経	自費	1937-1940	1938-1940 ○印	⑤⑪

						済系				
66	章 斌	24	安徽	1937	農学部実習員	安徽女高級蚕糸	自費	1937		⑤
北海道帝大										
67	徐 亜	24	江西	1937. 4	理学部化学聴講生	江西工業専門	自費	1937		⑤
68	婁梅博	22	浙江		理 化学 1 年	燕京大学 2 年修了	自費	1943		⑤
69	盧静芳	22	浙江		理 化学 1 年	燕京大学医学予科	自費	1943		⑤
大阪帝大										
70	陳 理	30	浙江	1934. 4	医学部選科生	江西省立医学専門学校	自費	1934-1935		⑤
71	陳 琮	23	浙江	1934. 4	医学部選科生	江西省立医学専門学校	自費	1934-1935		⑤
72	李 輝	24	江西	1934. 4	医学部選科生	江西省立医学専門学校	自費	1934-1936		⑤
73	李 莊	22	江西	1934. 4	医学部選科生	江西省立医学専門学校	自費	1934-1935		⑤
74	王育才	30	江西	1934. 4	医学部選科生	浙江省済生産科専門学校	自費	1934-1935		⑤
75	于飛瀾	27	浙江	1936	工 学 部 1936 選科生, 1937-1938 専攻生	奈良女高師	1937-1938 選拔	1936-1940	1939-1940 ○印	⑤
76	于軼凡	27	浙江	1937	工学部選科生	奈良女高師	自費	1937-1940	1939-1940 ○印	⑤

出典：

- ①外務省文化事業部「大正十三年度学費補給支那留学生ノ概況」大正 13（1924）年 12 月 27 日（外務省記録『在本邦留学生補給実施関係雑件』, JASAR. Ref. B05015411600）。
- ②中華民国駐日本公使館「十四年度在学補助費生名冊」大正 14（1925）年 4 月 30 日（外務省記録『在本邦一般留学生補給実施関係雑件』第 2 卷, JASAR. Ref. B05015422800）。
- ③『東京帝国大学一覽』大正 15 年一昭和 2 年（1926-1927 年）, 466 頁。
- ④「東大医学部へ支那女学生」『婦女新聞』1352 号, 大正 15（1926）年 5 月 9 日（復刻版・不二出版, 1982 年 12 月—1985 年 1 月発行）。
- ⑤日華学会編中国人留学生名簿（1927-1944 年度）。
- ⑥所澤潤「東京大学における昭和二十年（一九四五年）以前の女子入学に関する史料」『東京大学史紀要』第 9 号, 1991 年 3 月, 79 頁。
- ⑦外務省文化事業部「特種留学生ニ関スル補給（3）章雪琴」昭和 10（1935）年 11 月 15 日（外務省記録『日華学会関係雑件／補助関係』第 2 卷, JASAR. Ref. B05015271700）。
- ⑧外務省文化事業部「最近ニ於ケル文化事業ノ概要」昭和 3（1928）年 10 月 20 日調, 12 頁。（外務省記録『参考資料関係雑件』第一卷, JACAR. Ref. B05016150500）。
- ⑨小松茂「理学博士 陶慰孫女史を語る」『女博士列傳』, 財団法人科学知識普及会, 1937 年 7 月, 215 頁。
- ⑩張徳安：「陶慰孫伝記」, 『閑実之・陶慰孫百年誕辰記念文集』, 吉林大学出版社, 1996 年, 第 4 頁。
- ⑪佐喜本愛「九州帝国大学女子留学生に関する一考察」折田悦郎：（研究代表者）科学研究費補助金研究成果報告書『九州帝国大学における留学生に関する基礎的研究』, 九州大学, 2004 年 3 月。

[付記] 東京帝大の阮徳和と余竹軒については、加藤靖子（東京大学大学院教育学研究科特任研究員）先生から提供していただいた史料によって判明した情報であり、ここに記して謝意を表します。

就读于日本帝国大学的中国女学生（1927-1944 年）

—— 数据解读与个案分析 ——

周 一 川

摘要：中国女性帝国大学留学始自 1924 年，虽然人数不多，却代表着中国女性日本留学水准提高的新趋势。在经历了以初·中等教育为主的清末和向高等教育转换的民国初期后，中国女性的日本留学进入了包含帝大留学在内的高等教育为主导的新阶段。女性日本留学在中国近代女性教育中的定位，也从不可缺少的重要组成部分转变为中国高等教育的辅助手段。

帝大的中国女学生，本科生和大学院生人数极少，专攻生人数最多。专攻生在入学前都接受过高等教育，这为女性帝国大学留学打下了必要的学知基础，而日本帝国大学的专攻生制度，给已经接受过高等教育的中国知识女性提供了再学习和深造的机会。

关键词：留日女学生；帝国大学；留日学生统计；补给留学生